

隼人の出自

1. 地下式横穴墓の地域性について

地下式横穴墓は、南九州特有のものとしてされていますが、実際には南九州以外でも散見されており、戦時中までは一般的に南九州特有ということではなかったように思います。東京でもかなりの数の地下式横穴墓が発見されており、南九州以外でも、例えば大分でも発見されているようです。宮崎の考古学の報告書に書かれており、東京の件に関しては国会図書館の資料にもあります。ちなみに、「昭和19年4月の史跡名勝天然記念物調査報告第13輯 六野原古墳調査報告 宮崎県」に記載されている内容を再掲すると、地下式古墳は決して九州南部に限られたものではない、喜田博士に依ると福岡県豊前国築上郡黒土村字堀立（伊東尾四郎報）にありといひ、其他赤羽山の古墳（考古界第5巻第11号和田千吉氏） 越前国（梅原博士） 東京小石川（上田三平氏考説）等にもあるとのことで、その分布は本州地方に案外多かるべきやうである、とある。戦中の混乱、戦後の復興工事等で資料や史跡が失われたものであろう。ただ東南九州のみは、開発の遅れもあり地下式横穴墓が今でも検出されている。地下式横穴墓を調べると、南九州特有のものといわれるようになってしまった。

この地下式横穴墓が南九州特有のものではないとするとどう考えるべきか、ちょうど作られた時期というのは400年から600年ぐらいの間だと考えられているけれども、それは古墳時代で大量の中国系渡来人がやってきた時期であり古墳時代の渡来人が持ち込んだと考えるのが合理的ではないかと思われる。中国の古い時代の墓制を調べたものでは、漢の時代の下級墓制に地下式横穴墓そっくりのものがある。土洞墓といって中国で多数発見されており、それが日本に伝わったと考えるのが順当ではないだろうか。漢では、あの世・冥界は地下にあると考えられており、墓の多くは地下に作られている。

2. 初期新羅にいた古朝鮮遺民とは

初期新羅と言うと紀元0年ぐらいになるかと思うが、その時に新羅に古朝鮮の遺民がいたという風に三国史記の新羅本紀に書かれております。それではその古朝鮮の遺民とは一体誰なのかということになるわけですが、まず檀君朝鮮・箕氏朝鮮・衛氏朝鮮の三つになります。檀君朝鮮はほとんど神話の世界ですので論外として箕氏朝鮮の遺民、つまり生き残りの人たちが生活していたと書かれてるわけですが、衛氏朝鮮の生き残りということも考えられます。この色々な研究が韓国でなされていて箕氏朝鮮の遺民だと書かれてる本もありますが、また衛氏朝鮮の遺民ということが書かれてる本もあります。この二説を比較すると箕氏朝鮮は滅ぼされるわけですが、その時に海に逃れたと書かれております。『後漢書』には「初め、朝鮮王準が衛満に滅ぼされ、数千人の残党を連れて海に入り、馬韓を攻めて、これを撃ち破り、韓王として自立した。」と記されており、衛満に破れた準王は数千人を率いて逃亡し、馬韓を攻めて韓王となったという。

『三国史記』第1巻新羅本紀第1始祖赫居世居西干条11には「これより先に朝鮮流民が山と谷の合間に住んで、六村をなす」という記事が確認されるが、ここで言及された朝鮮流民は衛氏朝鮮の歴谿卿一派であると考えられる。と「三韓時代韓半島南部と東アジア社会の変動—『三国志魏書東夷伝』韓・辰韓・弁辰条を中心に—」で、釜山博物館 安 海成氏が書かれている。

3. 雨量と地下式横穴墓

地下式横穴墓は、乾燥地帯の墓制です。南九州は雨量が多いために地域的には不適合ということ

になるかと思えます。従いまして、地下式横穴墓が作られた期間はおおよそ 200 年ぐらいのことではないかと考えているところです。つまり AD400 年から AD600 年ぐらいということかと思っています。そこで気になるのは、中国から日本に来るのに約 600 年くらいかかっているわけですけども、その間ずっと地下式横穴墓を作り続けたということになるが、その経路は雨量の多くない所だっただろうと推定されます。古朝鮮の遺民が新羅に住んでいたという話を前提とするならば、新羅の雨量はどんなものかということになるわけですけども、日本に近いから日本と同じようなことじゃないかと思っていたわけですけども、具体的に雨量を調べると大変乾燥しているところでありました。これならば地下式横穴墓を維持できるんじゃないかと考えたところです。従いまして古朝鮮の遺民が新羅に住んでいたとするならば、地下式横穴墓もまた維持できたけど、百済では維持するのが困難になり、他の墓制に移行したであろうということです。

	雨量mm	4月	6月	8月
山東半島青島（燕）		33.9	70.8	158.9
朝鮮半島平壤（衛氏朝鮮）		56.4	106.9	236.3
朝鮮半島南西部光州（百済）		86.6	152.6	326.4
慶州（新羅）		85.5	142.4	179.0
宮崎県串間		215.5	423.8	259.1

4. 衛氏朝鮮の遺民の古代史

4-1 衛満の時代

漢の時代になって、山東半島辺りの燕国の王と満という武将がいました。漢に攻められると思って王は高句麗に逃れたのですが、満は朝鮮半島北部に逃れました。そのころの通貨明刀銭が、朝鮮半島北部あたりから発掘されております。そして朝鮮半島北部は箕氏朝鮮という国でした。箕氏朝鮮の最後の王準に話をして、自分たちが漢から守ってやるといい、つまり朝鮮半島北部の西辺を守るということを言って箕準に使えておりました。ある時箕準に対して漢が攻めてきた、大変だから自分たちがあなたたちのそばに行って守ってあげましょうということを申しでて受け入れられて箕氏朝鮮の城内に入って守る素振りをしていただけで、突然裏切って箕氏朝鮮を攻め滅ぼしました。箕準は海に逃れた、韓の王になったと書かれております。

其の後、衛氏朝鮮になるのだけれど、漢は高句麗を恐れその間の衛氏朝鮮の重要性を考え、衛氏朝鮮を冊封し、玉壁を与えました。しかし徐々に反漢に転じていきました。

明刀銭・灰汁巻が漢よりの伝来品となりましょうか。双方とも串間に存在しておりますし、玉壁もまた出土しております。

4-2 歴谿の時代

今度は漢に仕えていた衛氏朝鮮は、高句麗と漢の間にあり朝鮮半島を抑えるために、そこは非常に重要なところでした。徐々に反漢に舵を切りながらも、何とか漢の側にいたのですが、衛氏朝鮮の3代目の右渠の時代からますます漢との間が悪くなってきたわけです。これ以上漢との仲が悪くなるといつ責め滅ぼされるかもしれないなくなり大変不安定な状態に国はなるから、なんとか漢と折り合いをつけて仲良くして欲しいと、歴谿が右渠に諫言したわけですが受け入れられず、歴谿は仲間を引き連れて衛氏朝鮮から分派していったわけです。その後、衛氏朝鮮3代目右渠は漢と戦い、最終的には漢に滅ぼされてしまうわけです。どうなったかというと衛氏朝鮮から離れ、仲間を引き連れて出て行ったわけですけども、辰国に行ったという風に記されています。三国史記・新羅本紀に書かれているのは、新羅の最初期、古朝鮮の遺民が住んでいたと書かれております。この古朝鮮の遺民に関しては、箕氏朝鮮もしくは衛氏挑戦のどちらかということになります。そこで問題となるのは 南九州に伝わ

っているおそらく衛氏朝鮮の初期に漢から下賜されたと思われる玉壁です。この事績に関しては箕氏朝鮮がもらったという記録はありませんが、衛氏朝鮮がもらったという記録はあります。ただ衛氏朝鮮は漢と仲違いしていくわけですので、漢からもらったこの玉壁を大切に伝えるということが起きたらどうかということです。そういう風に考えると、親漢派の歴谿は王統の証明としてこの玉壁を持ち出し保持し続けた可能性が強いと思われるます。可能性の問題として考えるならば漢からもらった玉壁を親漢派の歴谿が持ち出し、それをずっと保持してきたのではないかと考えられるわけです。

「衛満の孫の右渠王が漢武帝の侵略を受ける前に、朝鮮相と歴谿卿は右渠王を諫めたが用いられず、東側にある辰国に亡命したが、その時民のうちで随う者が 2,000 余戸もあったという。その後、衛氏朝鮮との関係を絶った。」と記している。

4-3 新羅の時代

三国史記の新羅本紀に古朝鮮の遺民が生活していたと記録されておりますけども、前にも述べたように箕氏朝鮮もしくは衛氏朝鮮ということになるのです。箕氏朝鮮の最後の王準に関しては海に逃れたと書いてあります。一方衛氏朝鮮に関して言うならば、歴谿が東の辰国に逃げたとっております。地図から言うと東ではなく南と考えられるわけですけども、当初逃げた方向であろうということです。記録した側には、その方向しかかわからないと考えられます。準に関しては百済の 1 部族国家の王になってそこで滅ぼされたとなっているわけですので、可能性としては歴谿の末裔が生活していたと考えるのが、前者より妥当ではないかと思うわけです。しかしこの新羅で生活していたとしてもどこかの段階で逃げ出したということになるわけです。その時期を推定するならば AD350 年ぐらいではないかと思います。日本書紀に隼人が最初に現れるのは、応神天皇期の髪長媛が入内の時に畿内に入った時点だろうと推定しています。新羅の主導権は当初朴氏が握っていたのですが、昔氏に移り、このころ金氏が掌握したことになっております。昔氏から金氏に移行するわけですけども、その時の混乱で歴谿の末裔は新羅を逃げ出したのではないかと考えられるところです。

当時、倭と新羅はたびたび相互に侵攻し争っており、神功皇后の三韓征伐の話も、真偽はともかくその時期のものと思われるます。大和政権の力が朝鮮半島周辺まで影響することはなくて、北部九州あたりまでのまだら模様の勢力であったらと思うわけです。大和王権側から書かれた日本書紀では、夕月の君が大挙して渡来する時大和王権が手助けした話がありますが、日本人のゲノムを考えるなら、大挙しての渡来は本当だろうと思われるます。古墳時代の日本人のゲノムの変化は、中国系の人々が大挙してこの列島にやって来たことになります。弥生系の人々は、大きな変化は有りません。当時新羅にいた中国系の人とは、山東半島の燕国出身の衛氏朝鮮の遺民で歴谿の末裔、それともっと早く新羅に行ったという秦の始皇帝病死後秦国が滅び、その難民が馬韓に逃れてきて彼らに馬韓の東側・のちの新羅の地を与えたとあります。彼らが、金氏への政権移行の変動で新羅を飛び出したのだろうと考えられます。衛氏朝鮮の遺民は、日向（宮崎・鹿児島）国へ、秦国の流民は豊（大分）国へと移民していったのだろうと考えます。このことは、大和王権了解もしくは指示の下であったらと思われます。日向国に関しては、渡来人は、大和王権の豪族の下で協力し、生活しており、争った形跡は感じられません。

4-4 南九州の時代

さて金政権に変わる時に、逃げ出した歴谿の末裔は果たしてどうなったかということになるのですか、いろいろな勢力の間を通過してまずは五島列島に逃れたのではないかと考えております。というのは風土記中に五島に隼人のような者が住んでいたという記録があるためです。そこに一部の勢力を置いてそのまま南九州を回って、肝属あたりから串間そして大淀川を遡って生目・本庄そういったところに渡来したのではないかと考えております。さらに一ツ瀬川を遡って西都、小丸川を遡って高鍋・川南の方にまで行ったのではないかと考えているわけです。一つの材料として前方後円墳に地下室横

穴墓がかなり絡みつくような形で作られているわけです。その土地の豪族に新羅からの渡来民は服従したということだろうと思います。前方後円墳周辺の地下式横穴墓の埋葬遺体には、争った形跡がないということが言われているわけです。新羅から渡来する時にヤマト王権に話ができていたのではないかと考えております。大和側から考えると、今後稲作地として発展するであろう南九州の稲作を推進するために彼を利用したのではないかとということです。南九州特に南東部になるわけですが、稲作の盛んなところでもあります。但し、桜島周辺のシラス台地は、稲作には不向きで、その後の隼人の乱の原因ともなります。

4-5 隼人の時代

日本書紀上、隼人が出てくるのは住之江の皇子が隼人に暗殺された時ですけども、実際これが書かれたのは720年頃だろうと思われまます。この頃は奈良時代に該当し律令制度を南九州に持ってくるために南九州の民と大和王権が対立してる時でした。 応神天皇のもとに髪長媛が入内する時だろうと思います。一行が大和に入るわけですけども、加古川から上陸して大和に入っていくわけです。その時諸県の君牛諸井の子供の髪長媛が上陸するわけですけども、その時の状況は鹿の顔をかぶった男たち何十人かに担がれて上陸するわけです。この不思議な鹿の角のついた皮をかぶった男たちは、一体なぜそんな格好をしたんでしょうか。なかなか理解しにくいわけですけども、ただこの男たちが道教徒とであると考えれば、非常に理解しやすくなります。道教の中で寿老人という神様がいますがこれは長生きの神です。既に高齢の応神天皇の長寿を祈念して鹿の被り物をかぶった男たちに担がれて髪長媛が加古川から上陸したとするならば、諸県の君牛諸井の思いが想定できます。

5. 宇佐より隼人を教導するための移動

律令制度を南九州に定着させようと思っていた大和王権に対して、南九州の人たちはシラス台地のために収穫が悪く大きな反対をすることになりました。南九州の人たちにとって、律令制度というのは大変な困難を自分たちに押し付けるということで、多くの農民は反対したわけですけども、その反対を隼人の乱という言い方をすることになりました。果たしてその時の隼人とはどういう意味かという南九州の農民で大和王権の律令制度に反対したものは、全て隼人という言い方になったものと思われまます。

正しい本来の隼人というのは、日本書紀に書かれている住之江の皇子の暗殺や雄略天皇の葬儀の折7日間泣きつくして自死したというものです。隼人の乱の隼人は、幅広く反律令制度の南九州の農民を指しており、意味合いが違っているように考えています。つまり衛氏朝鮮の遺民として又歴谿の末裔として新羅で生活し、そして政変によってそこを飛び出して南九州にたどり着いた人たち隼人とするならば、隼人の乱のハヤトはかなり拡大解釈したものになってくると思います。記紀上隼人は天皇家の子孫とされており、大変厚遇された状態になっているということは、やはり大和に渡来する時には何らかの形で大和王権との交渉があって、どちらかという大和王権側が南九州の農業を推進するために、頼み込んでやってきてもらったのではないかと考えているところです。ということで大和王権のいわば地方豪族の墓である前方後円墳の周辺に争いの形跡もなく埋葬された状況を考えるならば、大和王権との合意のもとに、南九州へ渡来したものと考えられます。そのために隼人は記紀の中でも非常に高い状態で記載されているものだろうと思います。

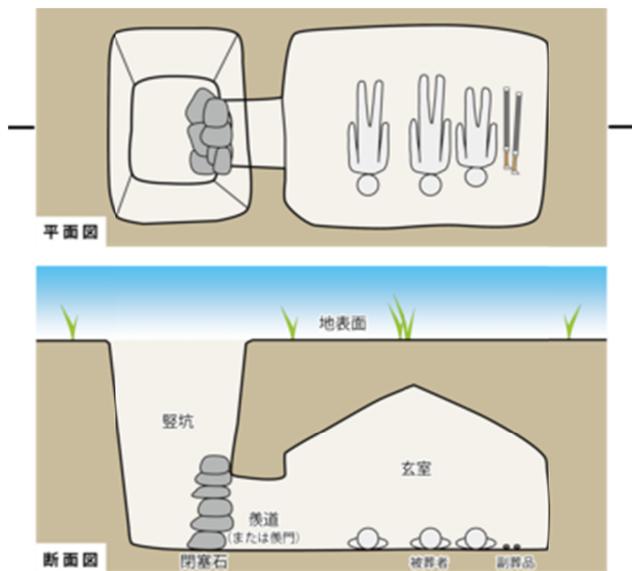
それでは、隼人の乱の時にどんなことが起きたかということですけども、隼人の乱の時100人首というのがありまして、隼人の首を100人分刈り取って宇佐神宮に持ち帰ったという伝説があるように、宇佐神宮周辺に渡来した民、この民も新羅系の人たちだと言われているところです。新羅系の人たちは隼人の乱の時の大和側の兵士になって南九州の方に攻めて行ったのだろうと思います。それと同時に隼人を教導するために宇佐の方から律令制度に順応した人たちを送り込んできたと伝えら

れているところです。私の調べたところによると宮崎県国富町森永というところに宇留島さんが何人か住んでおられます。けどもその人の言うには自分たちは宇佐からやってきたという。教導するために宇佐からやってきた人たちのすんでいるところです。

姓名辞典を調べますと少し古いデータの電話帳記載の名前から逆算するわけですけども宇留島という名前は宇佐に一塊あってその次に森永にもう一塊あってさらに肝付というところにもう一塊あるが、それぞれは全く何の認識もないわけですけども現在に伝わって塊として存在するところを見るとこれは 律令制度に反対する農民たちを教導するためにやってきた人たちだということが、ほぼ推定できるわけです。教導するためにのみ機能していたのかあるいは兵士として民兵として機能していたかは疑問があるところです。

おそらく、衛氏朝鮮系の新羅よりの渡来民と、秦の始皇帝系の新羅よりの渡来人が、AD350年頃九州に渡来しそれぞれ大和王権に貢献するわけですが、AD700年代になると敵味方にわかれ殺戮しあうことになります。新羅にいるときから、反目しあっていた記憶あつてのものかもしれません。

いずれにせよ、慶州で地下式横穴墓や灰汁巻そして明刀銭が発見されるのを待ちたい。



地下式横穴墓 漢で言うところの土洞墓



明刀銭 朝鮮北部から燕で出土 串間でも出土



南九州の灰汁巻 日本各地に少数だが
あり、台北にもあった。漢菓子



串間出土の玉璧 漢より下賜されたもの